

第5章 馬頭町の活性化における今後のあり方

第1節 馬頭町活性化の課題点

(1) 若年層の流出の食い止め

いわむらかずお絵本の丘美術館後援会の会員や馬頭町広重美術館のボランティアの構成メンバーを見ても馬頭町のお年寄り活発である。このことは大変結構なことであると思うが、将来的な視点では町の財政力を上げることやボランティア活動の担い手を育成するためなど地域活性化の担い手の若返りが必須だと感じるので私個人の考えとして馬頭町の最大の課題点を若年層の流出の食い止めに挙げる。

いわむらかずお絵本の丘美術館と馬頭町広重美術館の両美術館のボランティアに対する課題が若返りである。馬頭町社会福祉協議会の薄井さんのお話では、両美術館に限らず馬頭町のボランティアを担っているのは主に高齢者の方々であるが、馬頭高校の生徒の中には熱心に取り組む学生もいると言う。しかしこうした熱心な学生は進学等で町を離れてしまうため若い人材が育たず、40歳代・50歳代の主婦などにも協力してもらいたいと考えてはいるが不景気でパートに出ているなど社会事情を反映した実情があるためどうしても退職者など高齢者中心の活動になってしまうのだそうだ。

第3章第1節(2)にも記したとおり、馬頭町の統計指標を見ると栃木県の地方自治体の中でも財政力が弱いことが分かる。更に2000年の生産年齢人口構成比は49市町村中47位、農家世帯割合は5位、1999年の従業者30人以上の事業所従業者割合(民営)は40位であり、統計上から農業に従事する者が多く大規模な企業は余りないと言える^(註1)。この産業状況が馬頭町の若年層流出の要因だと私は思う。「那珂川連邦共和国」事業のメリットではこの地域課題の解決法の第一段階として第一次から三次分野まで経済波及効果が高いと言う理由で観光に着目しているが、私にはそうは思えない。

栃木県企画部統計課の統計によると2001年の栃木県内でお土産・食事等に使われた金額は4,943億円(推定値)で、県内で作られたもの(直接効果)は3,141億円であった。この直接効果を作り出すためにかかった費用が788億円(一次波及効果)、これらの生産現場で働く雇用者の給料として1,189億円が支払われた。このうち849億円が消費に回り、それによって629億円のモノやサービスが創出され、結果的に栃木県内で4,558億円の経済効果が得られている^(註2)。観光がもたらした県内産業への波及効果では構成比が大きいものは旅館や飲食店と言ったサービス業であり馬頭町の基幹産業である農林水産業では経済効果が3%、雇用効果が8.2%と、さほど大きな効果は得られているようには思えない。馬頭町では観光客による経済波及効果を望むよりもまず企業の誘致など根本的な雇用創出の機会が必要だと思う。

(2) 馬頭町の観光資源の活用

観光広報の見つめ直し

私の出身地山形県天童市では将棋の駒と天童温泉・さくらんぼが主な観光資源であり、これ以外の観光資源が見落とされがち傾向にある。そのような話を馬頭町役場の方にしたところ「馬頭町とは違って観光資源が多いと言うことですよ」との感想であった。しかし、馬頭町は観光資源が少ないとは私は思わない。温泉があり、蕎麦があり、窯がある。これだけでもある程度集客できるのではないかと思うのである。馬頭町は観光資源が沢山あるにも関わらず、知名度が低いことが最大の難点だと私は思う。

地元山形県では様々な市町村で「蕎麦サークル」を設け研究や普及活動を行った結果、昨今蕎麦処として知名度を上げ「次子そば」がある大石田町では見るものなど何もない場所にも関わらず店によっては休日には二時間待ちにもなると言う。マスコミの影響もあり、蕎麦を食べるためだけにやってくる物好きな人々の心をうまく掴んだ証である。

先日栃木県庁を訪れた際「南那須地方八溝新そばスタンプラリー」のパンフレットを入手した。南那須地方新そば祭りスタンプラリー実行委員会と南那須地方農業振興協議会が主催したもので南那須町・烏山町・馬頭町・小川町の農村レストランのうち3個以上のスタンプを集めると抽選で食事券がプレゼントされると言う企画である。好評で残部がなかったのかも知れないが開催期間中に二回馬頭町観光協会を訪れたがその際はこの用紙が全くなく振興のための企画にしては広報がおろそかな印象を受けた。せっかくの面白い企画が残念である。

馬頭町の観光政策を考える上で、これまで活かされてこなかった感のある既存の観光資源の広報活動を見つめなおすことがまず第一ではないかと私は思う。幸い今日の馬頭町の一押し観光資源である馬頭町広重美術館は雑誌などでマスコミに取り上げられることも多いようであるが、これまでの広報活動を改善しない限りは新しい観光資源を得たとしても集客が難しいのではないかと感じている。

観光情報誌「るるぶ栃木」では2002年版から馬頭町は町単独としては取り扱われず、「那珂川沿川地域」として紹介されている。これによって馬頭町の観光資源の紹介数は減ってしまった。いわむらかずお絵本の丘美術館が削減され、美術館では馬頭町広重美術館だけが紹介されている。この意図について編集部に尋ねたところ「当社が考える那珂川沿川のコンセプトが年配向けになっているからではないか」と言う回答であった。観光客が馬頭町を周知していて来訪してくれるのなら構わないが、せっかくの観光資源を広く知ってもらおうと言う意味で残念に感じる。馬頭町で一日を過ごそうと思えば過ごせるのであるが、「那珂川沿川」の一部としての観光地になることでメリットとデメリットが生じてしまうことも考慮しなければならない。

利便性の向上

馬頭町の観光における課題点として交通網の利便性の向上を省くことは出来ない。公共交通機関で馬頭町へ行くには宇都宮・氏家・烏山駅のいずれかからバスを利用しなければならない。最も近い烏山駅から馬頭町役場までのバスの所要時間は 40 分である。町内の観光地を周遊するバスもないので小砂焼やいわむらかずお絵本の丘美術館に行くためにはタクシーを利用するしかない。これでは観光客が仮に馬頭町へ行ってみたいと思っても足が遠のいてしまう気がする。検討中の那珂川沿川の観光周遊バスが早期実現することが必須に思う。

また、施設共通利用券があれば利用者にとって利便性が向上するのではないかと思う。美術館について言えば馬頭町広重美術館の基本構想の中にいわむらかずお絵本の丘美術館との共通券を設け相乗効果を計る内容が記されているが、5 年経った現在も存在しない。各美術館が協力して何かをするということもないそうである。町側の話では公立と私立の施設ではなじまない点があるので実現出来ていないとのことであったがそれであればなぜ基本構想に盛り込んだのか不思議に思う。馬頭町のまちづくりを調べる上で度々出てきた「公立の施設だから」「私立の施設だから」という発言に正直に言って驚いた。利用者からすればその施設が魅力的であれば公立だろうが私立だろうが関係はないと思うので、官民が連携して包括的な観光政策を取って欲しい。近隣の烏山町では「烏山散策の旅」と言う二施設の入館券とあゆ定食をセットにしたクーポン券がある。馬頭町でも美術館の共通利用に限らず、陶芸体験・乗馬体験・温泉入浴などの資源をうまく組み合わせて活用すべきだと思う。

第 2 節 馬頭町広重美術館はまちを起こせるのか

(1) 馬頭町広重美術館への町民理解

馬頭町のまちづくりの核となっているため馬頭町広重美術館はより多くの利用者を獲得し運営を安定化させなければならない。従って第 3 章第 2 節(3)でも触れたように町民への美術館の普及活動が今後の行く末を握っていると私は思う。町議会が設立を承認したことで町民の了承を得た形になっているが、町民の来館者が全体の割にも満たないと言われている中でどのようにして町民の町営美術館に対する理解を得ていくのか関心がある。

馬頭町広重美術館は誰のものなのか。県の予算が交付されたことからすれば「栃木県民の財産」とも言えるが、私はやはり馬頭町広重美術館はまず馬頭町民の財産だと思う。公立美術館としては異例の採算性を上げているとは言っても、現時点で年間 2,000 万円の費用を馬頭町が支払っていることは事実である。それに対して不満を持つ方も当然存在すると思うので美術館の運営を存続させる上で町の共有財産としての意識を定着させていく必要がある。現在の馬頭町広重美術館の普及活動は広報誌に設けている紹介コーナーを通じ

たものが主となっているが、そのほか美術館としてはボランティアの力を借りながら多くの来館者を呼びこめるような魅力的な企画展づくりを行い成果を得ていることが挙げられる。取り立てて美術館の管轄である生涯学習課では策は練っていないそうであるが、開館前からの普及活動の内容は丸二年経過した現在も変わっておらず新たな策が必要になっているのではないだろうか。

(2) 町の政策

白寄前町長が青木コレクションの寄贈受け入れを決めた際、美術品がまちおこしになればと言う気持ちがあったそうである。小砂焼や馬頭温泉郷を有しているものの一つの観光資源に特化することなくまちづくりの方向性が定まっていなかった馬頭町であるが、実際に馬頭町広重美術館が設立することきっかけとして馬頭町のまちづくりの気運は高まり、「広重の絵がいきづくまち」として一つの方向性を導き出している。所縁があるわけでもないのに広重の絵があることを誇りにして町がまとまりつつある様子はほほえましくもあり、感心している。それと言うのも、私の出身地である山形県天童市は「天童広重」と呼ばれる歌川広重の肉筆画に縁がある町にも関わらず全く広重で盛り上がっていないからである。天童の街には将棋の駒をモチーフにしたものが溢れ、それ以外の観光資源は見落とされがち傾向にある。自分の出身地に所縁のあるものが所縁のない馬頭町で大事に扱われていることを嬉しく感じる。

白寄前町長は政策の中で福祉分野を特に重点としていたそうであり、美術館設立と絡めて高齢者を対象としたまちづくりが行われている。2001年度の栃木県の「人にやさしいまちづくり」支援モデル事業がこれに当たり、表通りと呼ばれる商店街周辺の街並みに行われている事業の一つである。馬頭町広重美術館を中心とした周辺地域の整備事業は着々と進んでおり、美しい通りとなっている。

しかし、バリアフリー化され地域住民にやさしい街並みにはなったものの、表通りの活性化に馬頭町広重美術館の利用者を取り込む狙いもあるのだがこれについては現時点では商工会が望むような回遊性のまちづくりにはなっていない。その要因は美術館を出てすぐ駐車場があることと美術館の目の前の通り（地元では裏通りと呼ばれている）を少し進むと道の駅や食堂がある国道293号に出してしまうので周辺を歩く利用者が少ないためと考えられる。私自身、整備された馬頭町広重美術館と町役場周辺を歩いてみたが商店街に特に魅力を感じるものがなかった。美術館の利用者を取り込むつもりならば街並みだけでなく商店の魅力づくりも再考する必要があるだろう。

現在の川崎町長は、馬頭町広重美術館を核としたまちづくりを含めて前町長の政策方針を引き継ぐ考えを示している^(註3)。川崎町長は馬頭町広重美術館美術館建設委員会の商工代表の委員であった方なので将来的に馬頭町の商業が活性化するような政策を打ち出してくれるのではないかと期待している。

(3) 観光客増加の可能性

2001 年度の馬頭町の観光客入込数は 926,190 人で前年比 104.4%である^(註4)。近隣の烏山町の前年比が 88.5%であることと比較すると、2000 年 11 月の馬頭町広重美術館の開館が馬頭町の観光客入込数に貢献していると少なからず言えるのではないだろうか。ただし、宿泊数は前年比 98.6%と減少しているため馬頭町広重美術館の開館が宿泊まで波及効果があるとは言い難い。宿泊施設共々相乗効果をあげられるような魅力づくりが必要であると考えられる。

(註1) 栃木県統計指標ふるさとウォッチング平成 13 年度版。

(註2) 栃木県企画部統計課『とちぎの統計トピックス 2002』第 5 号。

(註3) とちぎテレビ『栃木県首長インタビュー』2003 年 1 月 6 日放送。

(註4) 栃木県市町村別観光客入込数平成 13 年度版。